

認知症高齢者に対するライフレビュー面接の再考

—記憶の受け皿、象徴的理解、メタ認知の変化—

林 智 一

(香川大学医学部)

目的

アメリカの老年精神医学者 Butler(1963)は、高齢者や終末期患者など死を意識した人に見られる人生の回顧をライフレビューと名付けた。それが適応的に進展した場合、「自我の統合性 対 絶望」の危機(Erikson, 1963)の解決をもたらすという。

我が国では野村 (1992)や黒川(1994)を嚆矢に、認知症高齢者に対する集団回想法として普及している。だが Haight & Haight(2007)は、想起するだけでなく、そこに評価を伴うことが回想法とライフレビューを分かつ点であると述べている。

一方、林(2016)は、認知症高齢者のライフレビューでは Webster & Young(1988)の3要因モデルで言う「想起」は生じるが、「評価」や「総合」が見られないこと、聴き手が語り手の記憶の断片を受け取る「器」となり、全体を俯瞰することで主要テーマを明確にすることが重要であるとした。

はたして認知症高齢者には、ライフレビューは不可能なのだろうか。そこで本研究では、認知症高齢者に対するライフレビューの効用と限界について検討することを目的とした。

方法

施設より紹介された在宅の認知症高齢者に口頭と文書で研究主旨を説明し、同意の得られた2名を研究協力者とした。臨床心理士である発表者が週1回50分のライフレビューを10回行った。

結果

1. 90歳代前半の男性、Aさん

(1) 生育史

農業を営む家庭に生まれ、18歳から代用教員をした。その後、従軍し、負傷したり収容所生活を経験したりしたが、戦後は正式な教員となった。現在は妻や子ども夫婦と同居している。

(2) ライフレビューの経過

前半では教員時代や戦争の思い出が中心に想起され、それらがライフワークだったようである。校長まで務めた華やかな職歴や軍隊でも「下士官の値打ちがある」と言われるほど高い評価を受けたことが有能感や達成感をもたらしていた。#5では自慢の娘婿について話題になるが、それ以外

の家族については語られなかった。学歴を尋ねても不明なままであった。だが、「これでひととおり話しました」(#5)、「今度は事例をまとめてきます」(#7)などの発言に見られるように、面接の流れを把握しており、今後の見通しも有していた。

2. 80歳代前半の男性、Bさん

(1) 生育史

自営業を営む家庭に生まれ、大学卒業後、公務員となった。出張や転勤が多い仕事であったという。現在は妻と二人暮らしである。

(2) ライフレビューの経過

前半では仕事の話が語られ、それがライフワークだったようである。人を育てる仕事だったので、「その中で自分も育てられた」(#8)という。順風満帆な仕事ぶりであったように語られるが、一方で「話には裏がある」(#7)、「最後は諦めかもしれないな」(#10)と、苦勞の部分は具体的に語らず、飲み込んでいたようである。要介護認定後の面接(#9)では、「忘れっぽくなりました」と言うが、#10では「忘れてしまうことも大事。そうでないと80年も生きられない」と、物忘れにBさんなりの意味を見いだしているようであった。

考察

軽度とはいえ健忘は明らかであった。だが聴き手が断片化した記憶の受け皿として機能することで、ライフレビューに相応の連続性が見られた。

また、仕事が有能感や達成感を生じる話題であると聴き手が理解できると、その話題を促進的に扱うなど、両者の間で相互的・循環的にライフレビューが展開していた。したがって、語り手の話題の象徴的意味を理解することが肝要となる。

ある否定的観念の中に肯定的観念が発見されるような語りにはならないが包括的、メタ認知的な部分で人生全体が肯定的に「評価」されることで、自我の統合性が得られているように思われた。よって、限界はあるが相応の効果も見られている。

【科研費基盤研究(C)17K04424『高齢者のライフレビューが生起するとき—奏功機序の解明と技法論の構築に向けて—』(研究代表: 林 智一)による】